

地域に生かされ、地域に生きる

～吐山の杜に太鼓が木霊して～

奈良市立吐山小学校

草尾 佳秀

1 地域遺産としての太鼓踊り

2010年、5年生で行う世界遺産学習の一環として、「地域遺産はやま」に取り組んだ。私たちはユネスコを参考に、「地域遺産」を、「地域みんなの宝物」「今までも、これからも変わらずに大切なもの」と定義し、「文化遺産」「無形遺産」「自然遺産」の3つに分けることにした。そして、地域遺産に登録する3つの基準(①吐山に住む人たちが大切にしてきた建物や芸術であること。②とてもめずらしく、大切な自然であること。③その文化や自然を吐山の人たちが守り、次の世代に伝える努力をしていること。)を作った。

具体的には、地域遺産の候補リスト作成→調査決定会議→調査活動→決定会議→まとめという流れで活動を組んだ。地域学習の本質は地域に生きる人との出会いである。10人の方に手紙を書いて、インタビューのお願いをした。そして、インタビューする内容を3つ以内にまとめる話し合いをして、準備した。現地調査も7回実施した。

DVDに収録して地域の人たちに広める。――これが私たちの学習の「ゴール」だ。プレゼン作りでは、1遺産についてスライドを8枚にした。使用する写真を厳選させ、「話題提示・問題提起」→「説明・解説」→「まとめ・提言」といった論理性のあるストーリーを作るためである。

吐山には、300年前から伝わる雨乞いの太鼓踊りがある。2回の聞き取りで、娯楽のなかった時代には太鼓の練習で集まるのが楽しみだったこと、必死の雨乞いの中で火災を起こす惨事があったことなど、記録誌には載っていない歴史を知った。また、保存会の方の話からは、小学生への期待の大きさを感じた。

2 「雨たんもれや」

～演じることで太鼓踊りを識る～

太鼓踊りが今日まで伝えられてきたのは、近年に至るまで、水不足に苦しむくらしぶりが存在したからに他ならない。それへの理解抜きに太鼓の叩き方を学んでも、太鼓踊りを識ったことにはならない。古老から借り受けた近世文書に刻まれた墨文字を子どもたちに引き寄せたい。――映画作りの原点はそこにあった。

昭和10年の雨乞いと昭和22年の太鼓踊りの記録や聞き取りの記録をもとに、映画のフレームワークを決めた。夏休み前に配役を決め、休み中に子どもたちの顔を思い浮かべながらシナリオを書いた。2学期になると、地域に出かけてロケを行った。子どもたちは、精一杯演じた。演じることで、先人の水への思いの幾らかを体感できたように思う。

■子どもたちの熱演に驚かされ、その成長を感じることができ、胸が熱くなる思いでした。それと同時に、各々の場面で映し出される吐山の自然の美しさが印象的で、あらためて自分たちの住んでいるこの土地の良さを再確認させてもらえる、「吐山の地域遺産」というテーマにふさわしいすばらしい映画でした。吐山太鼓踊りを学んでいくだけでも有意義だと思いますが、それに加えて、それにまつわる言い伝え

を自ら演じるということで、一層踊りそのものを子どもたちが自分のものにしていくことができ、より深く何かを感じていけるすばらしい授業であったと思います。
…(2011.1 保護者)

3 吐山の杜に太鼓が木霊して

本校では、5・6年生が総合の時間に保存会の方から太鼓踊りを教わり、1月の参観日に発表会をしている。またそれとは別に、地域活動として小学生の太鼓踊りクラブが組織され、秋祭りに神社で奉納されている。総合の活動の影響もあり、5年生の子どもは例年以上の割合でクラブに参加していった。月に1度の練習は7月から始まり、地域の人たちの厳しくも温かいまなざしが、子どもたちを包んでいた。

■私は、秋祭りで太鼓をたたいたことによって、分かったことがあった。それは、自分たちが、昔から受けつがれてきた太鼓踊りを受けついでいるということだ。吐山の伝統を受けついでいるというのは、うれしいことだと思った。(2010.11 夏子)

地域の人たちの思いに触れた子どもたちは、太鼓踊りを習っていることは「吐山の伝統を受け継いでいる」ことだと捉えるようになった。その後、1月の参観日、6年生10月の市音楽発表会、11月の秋祭りに太鼓を叩いた。そして、最後の発表の場となった1月の参観日を終えた子どもたちは、日記に次のように書き留めた。その目は、いつしか伝統を「受け取る」側から「受け渡す」側になっていた。

■太鼓踊りって楽しいという気持ちも、5年生に伝わったかなあと不安ですが、この「太鼓踊り」をついでいってほしいです。太鼓踊りは吐山の宝だと思いました。
(2012.1 梨恵)

■太鼓踊りは今日で最後です。今までを思い出すと泣きそうになりました。5年生もぼくたちみたいにうまくなってほしいです。そして、太鼓踊りはずっと残っていてほしいです。今日はとても思い出に残るような日でした。(2012.1 心)

4 地域に生かされ、地域に生きる

DVDは50枚作成し、お世話になった方たちにもらっていただいた。その後、地域からの要請でさらに180枚焼き増すことになった。「吐山に住んでいながら知らなかったことを教えてもらった」「自分たちの住んでいるこの土地の良さを再確認させてもらった」という声が、子どもたちを励ました。「おばさんにあいさつしたら、『〇〇役をしていた子やな。』と言われた。」と、うれしそうに語る子もいた。子どもたちは、地域に生かされている。

2011年、6年生になった子どもたちは、地域の戦争体験を調べてDVDにまとめた。「戦争中のことを滅多に話さない母のことを初めて知った」と、メッセージを届けてくれた方があった。地域の忘年会の酒席で、「今まで誰にも話したことないねけど…」と、自らの戦争体験を語り始めた古老がおられた。子どもたちの発信が、地域に生きている。

2012年、中学生になった子どもたちは、地域からの誘いを受けて大人に混じって太鼓を叩くようになった。そして今、「太鼓踊りクラブOB会」の組織化を視野に、毎月の練習に参加している。伝統芸能の後継者不足が深刻な当世、彼らの存在が一筋の光明に思える。お世話になった方の幾人かは故人となられ、或いは病で言葉を失われた。子どもたち

はそうした方たちの歴史をも受け継ぎ、地域に生きる一步を踏み出した。

■この太鼓踊りを通して日々地域の方々との交流が深まっていく中で、ぼくたちは太鼓踊り同様に地域の方々に守られていると感じました。(2012.8 等和)

5 おわりに

今年の4年生は、総合学習「川の旅」の活動で、用水路である「いで」の仕組みと役割について学んだ。5年生で出会う太鼓踊りの背景として、子どもたちに伝えたい暮らしの知恵である。

地域にこだわりつつ、4年目の秋を迎えている。地域の資料を整理していた時、子守唄の歌詞と採譜された楽譜を見つけた。それは、「御経野の子守唄」と歌詞もリズムもよく似ている。かつて、部落史の見直しが進められていた頃、地区の指導者から、この唄ではムラの子に誇りを持たせることはできないと言われた。以来、すっきりしない思いを持ちつつ時を過ごしてきた。御経野で葛の根を掘るくらしの中に子守唄があったように、吐山では水に気を揉む稲作しごとの中に子守唄があったのである。地域を丁寧に学び直し、そこに生きる人たちの暮らしを紡ぎ、持ち寄り、交流できたら…「同和教育」再生の糸口が見えてくるに違いない。